

第12回北大形成外科アカデミー



教育研修施設レポート UHS English Literature Library 院 生 研 究 発 表

日時：平成19年12月8日(土) 13:30- 16:40 場所：北海道大学医学部臨床大講堂
代表：北海道大学医学部形成外科 教授 山本有平
事務局：北海道大学医学部形成外科学教室 運営委員長：関堂充 運営委員：古川洋志

プログラム

13:30～14:50

教 育 研 修 施 設 レ ポ ー ト

時 計 台 記 念 病 院

苦 小 牧 日 翔 病 院

市 立 函 館 病 院

浦 添 総 合 病 院

(20分 / 施設)

15:00~15:40 UHS English Literature Library

[Hayashi T, Sasaki S, Oyama A, Kawashima K, Horiuchi K, William M, Yamamoto Y.](#)

New grading system for patients with treacher Collins syndrome.

J Craniofac Surg. 2007 Jan;18(1):113-9.

[Tsutsumida A, Furukawa H, Yamamoto Y, Horiuchi K, Yoshida T, Fujii S.](#)

Low incidence of nonsentinel node-positivity after complete lymph node dissection in melanoma patients with positive sentinel nodes.

Int J Clin Oncol. 2007 Jun;12(3):242-3. Epub 2007 Jun 27.

[Tsutsumida A, Furukawa H, Hata S, Saito A, Yamamoto Y.](#)

Prediction of metastases in melanoma patients with positive sentinel node: histological and molecular approach.

J Dermatol. 2007 Jan;34(1):31-6.

[Tsutsumida A, Furukawa H, Yamamoto Y, Horiuchi K, Yoshida T, Minakawa H, Fujii S, Murao N, Kuwahara H, Minamimoto T, Fujioka H, Sakamoto T, Honma T.](#)

Sentinel node biopsy versus elective lymph node dissection in patients with cutaneous melanoma in a Japanese population.

Int J Clin Oncol. 2007 Aug;12(4):245-9. Epub 2007 Aug 20.

[Furukawa H, Tsutsumida A, Yamamoto Y, Sasaki S, Sekido M, Fujimori H, Sugihara T.](#)

Melanoma of thumb: retrospective study for amputation levels, surgical margin and reconstruction.

J Plast Reconstr Aesthet Surg. 2007;60(1):24-31.

[Furukawa H, Saito A, Mol W, Sekido M, Sasaki S, Yamamoto Y.](#)

Double innervation occurs in the facial mimetic muscles after facial-hypoglossal end-to-side neural repair: rat model for neural supercharge concept.

J Plast Reconstr Aesthet Surg. 2007 May 15; [Epub ahead of print]

[Furukawa H, Sasaki S, William M, Sekido M, Tsutsumida A, Oyama A, Yamamoto Y.](#)

Modification of thoracoscopy in pectus excavatum: insertion of both thoracoscope and introducer through a single incision to maximise visualisation.

Scand J Plast Reconstr Surg Hand Surg. 2007;41(4):189-92.

[Yamamoto Y, Sekido M, Furukawa H, Oyama A, Tsutsumida A, Sasaki S.](#)

Surgical rehabilitation of reversible facial palsy: facial-hypoglossal network system based on neural signal augmentation/neural supercharge concept.

J Plast Reconstr Aesthet Surg. 2007;60(3):223-31.

(5分／編)

15:50～16:40

院 生 研 究 発 表

(10分/名)

Mol William

血管奇形・リンパ管奇形の硬化療法の治療モデル：硬化剤の内皮細胞に対する作用の比較

体表面の血管奇形やリンパ管奇形に対して、近年エタノールやポリドカノール等を用いた硬化療法の有用性が報告されてきている。硬化療法を安全に行うためには、用いる硬化剤が血管内皮細胞やリンパ管内皮細胞にどのように影響するのかを知る必要が有る。また、さまざまな硬化剤を同一の条件下で比較できる治療モデルが望まれる。そこで、私達は硬化剤の比較が可能な硬化療法の治療モデルを作製し、血管内皮細胞やリンパ管内皮細胞の反応（細胞死、炎症）について調べたので報告する。

齊藤典子

メラノーマにおけるリンパ行性転移メカニズムの検討：メラノーマ細胞とリンパ管内皮細胞の相互作用

リンパ行性転移はメラノーマの重要な予後因子だが、そのメカニズムの解析は血行性転移に比べ、遅れをとってきた。しかし最近、リンパ管内皮細胞(LEC)のマーカー分子の発見や単離・培養技術の向上により、リンパ節転移メカニズムが癌組織におけるリンパ管新生という観点から解析され、癌細胞の産生するリンパ管新生因子(VEGF-C, D)などが注目されている。本研究では、メラノーマ細胞(MM)およびLECの産生する液性因子が互いの細胞に対して及ぼす影響について検討している。ヒトMM細胞株およびヒト新生児真皮由来LECを用いて細胞増殖、走化性などを測定した。その結果、MMおよびLECが産生する液性因子は互いに作用し合い、リンパ行性転移に対して促進的に働く可能性が示唆された。現在、これらの生物活性を示す因子の分離・同定に奮闘中である。

小浦場祥夫

難治性潰瘍の病理組織学

創傷治癒は外科学における最重要研究テーマの一つである。難治性潰瘍には実に様々な要因が存在する一方、創傷治癒機転の障害に関してその詳細は十分解明されていない。その原因の一つは実験動物による難治性潰瘍の再現の難しさにある。病態の解析に実験動物を用いる最大の理由はヒトからの組織採取が容易に行えないからに他ならないが、形成外科医は手術により傷を治すという日常診療において創傷組織の入手が可能で、創傷治癒研究においてこれ以上ない恵まれた環境にいる。私はこれまでに100例を超えるヒト潰瘍組織の病理標本を観察し、特殊染色、免疫組織化学染色などを用いて様々な潰瘍の病態に関する検討を重ね、臨床医にも納得のいく病態生理を見いだしつつある。特に微小循環と筋線維芽細胞による創収縮の観点から肉芽組織の評価を行うと、一見秩序なく見える創傷組織がきわめてシンプルな構造を持ち、何が問題なのか明かに判断できるようになってくる。

大澤昌之

癌のリンパ行性転移の撲滅を目指して ～リンパ系を標的としたドラッグデリバリーシステム (DDS) の開発～

【背景】われわれは、リンパ管・所属リンパ節を標的とするDDSを開発するにあたり、候補となる分子を、1) リンパ管内皮細胞がその分子に対して受容体を有している、2) 分子の代謝経路がリンパ系を介する、3) その分子がリンパ管を経由する現象が、リンパ液の運搬や腫瘍のリンパ行性転移に関与する、4) 既に臨床応用されている分子である、こと等を考慮しヒアルロン酸に着目した。ヒアルロン酸は、体内の全ての組織の細胞外マトリックスに豊富に存在し、末梢組織で産生され、リンパ管を経てリンパ節に入り血管から脾臓、肝臓へ運ばれて分解される。しかし、末梢組織の皮内・皮下に局注されたヒアルロン酸に関する基礎的な研究はまだ多くなされていない。【目的・現在の実験内容】マウスの末梢組織に局所注射されたヒアルロン酸の所属リンパ節への動態を調べるためアイソトープ、蛍光色素での、ヒアルロン酸の標識方法の開発および動態実験、等を京都大学田畑泰彦先生の研究室と共同で行っている。

長尾宗朝

①ケロイド多発患者における末梢血の解析 ; Circulating fibrocyteの探求

ケロイドの患者では、病変が多発あるいは再発する傾向がある。その成因には、局所のみならず、全身的な影響があると考え、循環血液中の線維芽細胞、つまりCirculating fibrocyteの解析を行うことを考え、研究を進めている。Circulating fibrocyteは、骨髄由来幹細胞から分化し、細胞外基質やサイトカイン産生などに働く細胞である。健常人ならびにケロイド体質患者から血液を採取し、そこから分離、培養して得られた細胞の性質を比較検討した途中経過を報告する。

②褥瘡発生におけるずれ力が及ぼす皮下血管への影響の検討

近年、褥瘡の発生要因については、圧力に加え、ずれ力の関わり合いが注目されている。低い局所圧でも、ずれ力が加わることで、体表面の血流量は容易に低下することはわかっているが、それに加え、実際には皮下組織にも血流量の低下が生じていると考えられ、皮下組織におけるずれ作用時の血流の変化つき検討を行っている。(大浦武彦先生、工学部高橋誠先生との共同研究)



事務局：北海道大学医学部形成外科学教室
運営委員長：関堂充 運営委員：古川洋志